

# まんだら通信

第233号 (通巻268号)

平成27年11月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## お寺の役目

以前探し物をしていた時、須弥壇の下から色々の反古が出てきました。  
江戸時代終わり頃のもので、すが、メモなどに混じって俳句の運座(今風に言う)、定例俳句会です(の記録もありました)。

集まった人の名前を見ると、お金持ちだけではなく、極く普通のお百姓さんや職人さんもいます。昔は一般の人はみんな貧しく、食うことに精いっぱいだったと、よく言われますがそうではなかったのです。



宝泉寺さまの前のご住職(私の師僧に当たります)に、生前聞いた話ですが、昔、村の寄り合いで話がつれ、にっちもさっちも行かなくなると、「方丈さまあ、一つ頼みます。」と声がかかるのだそうです。  
方丈さまが衣に袈裟という正装で、みんなが集まっているところに出かけ、どっかりと座ると、お互いに我を張ることをやめて、丸く治まることになっていったそうです。  
ほんの一例を挙げましたが、産まれた子供の名付け親、夫婦や親子、隣近所の大小のいさかいの仲裁など、お寺の果たしたことは小さくありません。

紫雲寺だけ特別そうだったのではなく、例えば塩浦の宝泉寺さんには、今はなくなつたそうですが俳句の絵馬が掲げてありました。  
寧ろ昔の方が、みんなの気持ちにゆとりがあつた証拠、といつていいでしょう。

紫雲寺の代々のお墓のうちで、一番立派なのは、明治三十七年一月に遷化した、中興第三十世の盛璇(下の字は手偏です)和尚のもので、生まれは小塚大師近くの尾場の早川孫右衛門家で、これに因んで『おんは方丈』と呼ばれていたそうです。

私がお寺に弟子入りした頃は、直接知っているお年寄りやご健在で、背が高く、おれたち子供にはおつかねえ方丈さまだったけど、お客さんが好きだと見えて、いつも誰かが遊びに来てたつて。」と話していました。

私も憶えています。庭に豊後梅の古木があつて、とても大きな実がつきました。この梅干しをお茶うけに出すのだそうです。余りの大きさに、お客さんが手を出さずに帰ると、次に行つた時また同じ梅干しが出てきて閉口した、などという滑稽な話も残っています。

宝泉寺さまの前のご住職(私の師僧に当たります)に、生前聞いた話ですが、昔、村の寄り合いで話がつれ、にっちもさっちも行かなくなると、「方丈さまあ、一つ頼みます。」と声がかかるのだそうです。

今まで話したことはありませんが、夜分に來られて家族の不始末を洗いざらいぶちまけて、すつきりした気分が帰つた人も一人や二人ではありませぬし、お寺から、人に知れないようにお葬式の費用を出したお家もあります。

このように、お寺はよろず相談窓口であつたし、今でも変わつていないということが言えます。

現在は、公の機関がそれこそかゆいところに手が届くように、問題に応じて沢山の窓口を開いています。

裁判所、警察署、学校、病院、お役所、社会福祉協議会、消費者センターと数え上げればキリがないほどです。

でも、休みの日や時間外は受け付けませんし、何よりも相談に乗つてくれる人が見ず知らずの人では、型通りのことしか話せませんね。

私も、長い間『心配ごと相談』に関わつていましたから、この辺りのことは良く分かります。人の悩み事が星の数ほどあるということは、毎日の新聞の社会面が証明しています。

お寺とお檀家の間は家族と同じです。少なくとも紫雲寺では、三六五日、二四時間いつでも遠慮は要らないのです。

それに、もう一つ肝心なことは、どのような際どい話も、少なくとも紫雲寺では、絶対に外には漏れないことです。以前書きましたが、本堂の一番奥の部屋はのために用意したものです。但しお金の無心は、これだけはもう、こちらがしたいくらいですから困りますが。

上の写真は、スリランカの北の方、アヌラダプラの大きなお寺の、緑の境内の風景です。

手前と右奥のテントは、民間団体の接待所だそうです。日本でも、布施は出家在家を問わず仏教徒の大事な修行ですし、四国八十八ヶ所や小豆島の『島四国』のお接待は良く知られていますが、スリランカでは国中の一人一人が、ごく当たり前に実行しています。道端で、中学生ぐらいの子達が、マンガ・ジュースを振る舞ったり、亡くなった親御さんの供養にと、数日係りで準備して、大勢のお坊さんや地域の人たちを招待して、食事の接待をすることも多いそうです。

**ふれあいコンサート 2015**  
11月22日(日曜日)  
午後6時開場  
会場 紫雲寺  
入場料 2,500円



出演  
深津純子(フルート)  
ファビアーノ・ド・ナシメント(7弦ギター)  
寺前浩之(バンドリン)

深津さんは、館山の親善大使になる前、草葺きの本堂の頃からの“ご常連”。今回一緒に顔ぶれから、情緒たっぷりの、中南米音楽など聴けるかと楽しみです。秋の夜長、お誘いあってお越し下さい。問合せ先 0470-38-4740 紫雲寺です

## 第一一八話 展覧会

この齢になりますと、宴会で乾杯の音頭をとることが多くなりますね。  
そんな時、私は、時々、こんなことを言つて、集まった人たちを困らせているんです。  
「アンニョンハセヨ。じゃ、乾杯しますよ。どうせなら、今日は韓国語でお願いします。乾杯は韓国の言葉で、ノミホセヨですね。はい! ノミホセヨ」  
すると、決まって、ひと口飲んだ人たちの間から「へえ、韓国語で乾杯はノミホセヨってなんだ」なんて声が聞こえてきますと、思わず笑っちゃいます。ウソに決まってるじゃないですかねえ。  
今日は、秋田県仙北市の教育委員長の安部哲男さんから、直接うかがった話を小断ふう



に書いてみますね。

あれは、もう四年ほど前のことでした。仙北市の美術館で「河正雄（ハ・ジョンウン）コレクション『故郷展』』という展覧会が開催されました。

そのオープニングパーティーの出席者百五十人の中心に、河さんがいました。河さんがこれまでに収集した韓国人画家の作品を中心とした展覧会です。河さんは晴れ晴れとした顔をしています。安部さんは、その横顔を見ながら、深い感慨に浸っていたそうです。

河正雄さんは昭和十四年大阪生まれ。その名の通り、在日二世です。お父さんが田沢湖のダムや水力発電所の建設工事の労働者として働いていた関係で、昭和二三年九月に東大阪の小学校から秋田県の生保内小学校に転校してきたようです。

その時、安倍さんと当時、河本と言っていた河さんは、同級生になりました。安倍さんはその時の様子をこう書いています。

「実は彼は私たちと遊べるような状況ではなかったのである。学校にくる時は必ず幼い弟を連れて来なければならず、いつも子守をしながら勉強をしていた。クラスの大部分は、どうしてぎやーぎやーうるさい弟を学校につれて来るとだと思っていたし、彼の弟が泣き出すとみんな『またか』という顔で彼を見た。そうすると彼は、さつと弟を廊下に連れ出して、泣きやむまで教室に戻ってこなかった」

河さんは、五人兄妹の長男。戦争直後の在日韓国人の多くがそうであったように、家が貧しくて、お母さんも肉体労働をしたり、「かつぎ屋」として、東京に闇米を運んだりして生計を立てていたの、弟や妹の面倒は、河少年にまかされていたのです。

冬の秋田の据立小屋のような家で朝五時前に起き、炊事・洗濯を済ませて、毎日山道を歩いて働きに行くお母さんの姿を、河少年は、どんな気持ちで見えていたのでしょうか。

もちろん、安部少年は、そのことを後年、彼の口から聞くまでまったく知りませんでした。

その頃の気持ちを安部さんは、正直に、こう綴っています。

「うるさい弟を連れて学校にくる彼を見てみると、なんとなくうとましく、変に立派ぶっているように見えたし、先生方にもほめられるし、私たちにとってはおもしろくない存在として、好ましい印象をもてなかったというのが正直なところであった」

実際、成績はよく、絵を描かせればいつも大会で入賞していました。中学に入って、彼の絵の才能を引き出してくれる教師に出会います。田口育生先生という美術の先生でした。先生は自宅を開放し、貧しい生徒には絵の具を分け与えるほどの情熱教師でした。

貧しい生活の中で、絵を描くという楽しみを見つけた彼は、母に画家になりたいと言いましたが、生活苦の家庭の長男が絵を描くことは許されません。やむをえず、高校を出ると埼玉県に出て、そこで働きはじめます。

やがて、始めた事業が大当たりして、大金を手にした彼は、そのお金で貧しい韓国人の画家の絵を次々と購入したのでした。自分が果たせなかった夢を、若い同胞の画家たちに託したと言ってもいいかもしれません。その数、数千点と言いますから、どれだけのお金を注ぎこんだのでしょうか。

河さんは、自分を育ててくれた秋田県に自分の資金で美術館を建て、その全作品を寄贈しようと思ったのです。しかし、さまざまな事情で、それは実現せず、結局、父親の故郷である光州美術館をはじめとした、韓国の八つの美術館に寄贈したのです。

その話を知った安部さんは、河さんに電話を入れました。

「それは残念だなあ。せつかくのコレクションを僕たちの同級生や、僕たちが育った生保内の人たちに見せてあげたかったなあ。」

あの河本君のコレクションだよって」

河さんは安部さんの電話に心を打たれました。自分が貧しい在日韓国人の子供であつてもまったく偏見も待つことなく、差別もいじめもなかった生保内小・中学生の同級生が「コレクションを見たいと言ってくれた！」

河さんは言いました。「ありがとう。光州の美術館に送る分がまだ順番待ちで残っている。でも、いつまでも返事は待てない。それでよければそちらに送るよ。でも、展覧会をやるとお金がかかるよ。僕が出してもいいよ」。安部さんは、「まかせてくれ」とひといいって電話を切ると、仙北市の市役所を訪れ、教育長に。教育長は副市長に、そして副市長は市長にと話が伝わったのです。河さんの故郷への思いが伝わったのか、行政のトップの三人がなんと、予算を含めて、在日韓国人のコレクション開催にゴーサインを出したのでした。

それからは、安部さんははじめスタッフは、目の回る忙しさだったそうです。そして、この日、オーブンを迎えたのです。会場では、次々と挨拶が続きます。

安部さんは、かつて河さんが安部さんに言った言葉を思い出していました。

「安部君、僕はね、高校卒業まで、この秋田で一度たりとも、在日韓国人であるというところで差別されたこともないよ。だから、僕がここが故郷なんだ」

安部さんは、思ったそうです。

（ごめん。君には敵わないと思った時に僕は『在日のくせに』と何度も眩いたよ）

安部さんは、ふと、「河正雄コレクション『故郷展』』の図録の河さんの挨拶文を読みました。

そこには、こんな文章で結ばれていました。

「最後に、生保内小・中学校時代の学友安部哲男君に厚くお礼を申し上げます」

▼月日の流れの速いこと。つい先日232号を書いたと思ったら、もう233号です。歳のせいかも知れないなと、つい思ってしまいます。歳のせいといえば、物忘れのひどいこと。殊に漢字を書けなくなりました。「犯人」はパソコンですね。「おしえる」の漢字はどう書くんだっけとか、いつも戸惑っています。

▼「この次は、いつスリランカに行きますか」と聞かれます。毎度あいまいな返事をしてきましたが、年金の使い方をやりくりすれば、来年半ばには行けるかなと思います。スリランカなら、万が一車いす生活になっても、何とかかなりそうですから。『あそか基金』の奨学生たちとの食事会も楽しみです。

▼自分の中身を濃くするためには読書が一番、と言われる。スマートホンがはやり出すまでの日本人はその通りで、千年前の古典が発行され続ける国は、日本以外ざらにないと、自慢めかして言われました。今、読書の習慣が音を立てて崩れているそうですね。折から『灯火親しむ』の夜長の季節。あらためて今日『徒然草』と『方丈記』を注文しました。解説は、偶々ですが、あの『清貧の思想』の中野孝次さんです。▼来年ですか消費税が10%上がります。暮らしがもっと厳しくなると、反対の人が多いか。でも我慢しないと若い人たちに付けが回ることになるのですが。

▼今月の野草。といっても花ではなく、色づいたヤマノイモ【ヤマノイモ科ヤマノイモ属】（日本原産）の葉です。林の縁などに生え、この季節になると掘り出しかけました。掘り出すのは重労働でしたが、粘り気が強く、香り高く、それはそれは美味しいものです。最近は畑で栽培したものが買えますが、香りと味は比べ物になりませんね。写真の左に、こぼれ残ったむかごが2ヶ見えています。から煎りしたむかごがまた美味しいものです。ブラジルは世界の田舎むかご飯という俳句を、この季節になると何故か思い出します。2015.11.08 龍渉

